

C-3 岩沼市寺島蒲崎地区

2011年12月27日(火)

報告者名	滝澤 克彦	被調査者生年	1933年(男)
調査者名	滝澤 克彦	被調査者属性	大工
補助調査者	兼城 糸絵		

話者について

大工をしていた。自分の作った家は今回の地震・津波でも残ったところが多かった。平成10年ころから3期+1年(10年)、蒲崎の区長を務めた。軽い脳梗塞を患い、途中で退任した。市全体の区長会長を務めたこともある。現在は瓦礫撤去の仕事をしている。

被災状況

蒲崎地区のほとんどの家が流された。話者の家は作業場が1階部分が石造りだったため残った。話者はそこで住み続けようと思ったが、若い人が反対したので解体した。今は解体すれば費用が全額補助されるというのもその理由である。集団移転の話も上がっている。そんななか、すでに正式に元の場所に戻った家が1軒ある。

部落の社会組織

蒲崎は100軒で契約会が始まったが、分家や他所からの移入で震災前には125軒あった。昔は10町歩の田んぼがあったが、それを売って現金にした。皆に配当したが、そのうち1軒あたり10万円の株券を発行し、その利息で年間の会費をまかなってきた。ところが、利子が安くなるにつれてまかなえなくなってきたので、去年解散した。契約会は10人の役員と2人の区長で運営していた。区長は任期3年であった。

町内会は平成12年から作られたが、契約会と町内会の役員は別々だったし、同時に存在していた時期もあった。現在は1軒あたり会費10,500円徴収している。それは公会堂の維持等に使用している。祭りの予算は氏子から別で徴収するようにしている。

契約会の会長が(神明社の氏子)総代長を務めていた。

湊神社

湊神社はもともと阿武隈の堤防のところにあった。平成元年に堤防の拡張工事があった移転した。ハウキ神さまとも呼ぶ。本当の名前は「湊神社」。観光ガイドに書いてあったので確かだと思う。湊神社は本来は子授けの神様である。湊神社は外側の細工が凝っている。わざわざ山形から宮大工を呼んで作った。130年くらい前ではないか。

神社の本殿に向かって左側の木が「子授けの神様」。太いイノメの木(?)の根元から生えた椿がすなわち子授けの神木である。子授け祈願、安産祈願としてその神木に対して参拝し、出産

後にホウキとマクラを納める。マクラは紅白一対のものを神社より貰ってきて祈願成就後に倍返しにする。糲殻で作る。ホウキはトウモロコシで作った。

4～50年ほど前までは、ビニールシートで木を囲い、そのなかで女性が裸になってご神木を抱くという方法の祈願が行われた。

湊神社は新浜と蒲崎の合同で祭っており、その祭日は旧暦の2月15日である。ちょうどユキハナ（雪花）が飛んでくるような季節。ただし、旧暦で祝っていたのは50年ほど前まで、その後3月の第3日曜に変わり、10年ほど前から3月第2日曜に行っている。それは、第3日曜だとお彼岸と重なるため、料理を作らなければならない女性たちの負担が多くなるからである。

湊神社の神輿は神明社脇の倉庫に保管されていた。神輿は、平成元年の湊神社移転の時に入った300万近くの補償金のうち200万円ほどを使って作られたものである。神輿は納屋に住んでいたA氏が刑務官を務めていたことから、刑務所で作られたものである。刑務所の仕事は固く、金額も安いからであるという。昔の神輿は60cm四方ぐらいの大きさだったのではないか。

かつては祭のさい神輿をかついで運んでいたが、現在のものは1tほどの重さがあるため、当初はかついでいたものの、現在では軽トラックで運ぶようになった。

神輿は神明社から出て、湊神社でお祓いをした後に新浜へとまわる。新浜では昔は1軒1軒まわっていくが、今では回ってきてほしいと頼まれた家（新しい嫁がやってきた家や新たに引っ越してきた家等）を回っていく。大体午前中に神明社を出発して、湊神社でのお祓いを終えて、昼頃神武天皇社に到着する。そこでも別当さんが祈祷をし、公会堂で昼食をごちそうになる。その後、大体13時ぐらいから蒲崎の何軒かを回ったら津神社へ。本来ならば神様のいる場所から先に回らないといけませんが、順番を考えてこうなっている。

獅子舞も行われていた。お祭りの時に神輿と一緒にでた。シシバクリといった。世話役の人が2人いて、その人たちが担った。それも去年までやっていたが、獅子頭も流失してしまい、今年は一切なくなった。

神楽は行っていない。早股というところにあって、それを呼んでいた。話者が最後に見たのは昭和30年頃か。

秋にも祭りを行う。秋は11月第1日曜日。その時は「樽みこし」をかついで回る。酒樽の大きいものに化粧を施して、子供たちに担がせる。その時も別当が祈祷する。神輿の担ぎ手は小学生以下に限っており、中学生は混ぜない。この時も集落を回るが、それは育成会の寄付金集めも兼ねている。



写真1 湊神社のご神木

神明社

神明社は五穀豊穡の神様で蒲崎地区の鎮守である。毎年元旦には神明社に集まって祈祷していた。現在神明社は津波によって流されてしまい、木の柱を立てている。それは、今年の元旦祭を



写真2 神明社跡

するためである。元々湊神社とは別々に祭を行っていたが、現在は同じ日に行っている。かつては4月だったような気がする。

講

神明社の手前にある石碑は、出羽三山参りをした記念に立てたもの。村の代表として男の参加者たちが歩いて出羽三山まで参拝した。彼らが生きていれば120歳くらいの、そういう人たちが参加した。古峰ヶ原講は昭和の終わり頃まで代参を

行った。また、2～3ヶ月に1度旧暦の何日かに持ち回りで食事会を開催した。その際、掛け軸を下げて皆で拝んだ。その掛け軸も持ち回りで保管していた。

別当

蒲崎の別当はB氏という人で、民生委員も務めた人だった。B氏は金蛇水神社で務めていた。B氏の祖父が立派な別当であった。父は船乗りだったが海で亡くなった。祖父の次は、C氏という部落外の神職が別当を務めていた。そのため、部落のアガリが余所へ行ってしまうということがあった。それに対して、部落で金を出してB氏に神職を学ばせ資格を取らせた。B氏の次代が婿養子であったため、現在30足らずの孫が別当を務めている。孫は一時金蛇水神社に務めていたが現在はやめ別の会社に勤めている。お祭りの時には祈祷ができる人物が必要だったため、その孫が会社を選ぶ際、お祭りの時に休みが取れるような職業につくことを条件とした。なぜなら、村としても休んでもらわないと困る上、そもそも部落でお金を出して別当の資格をとらせているから。よその別当に来てもらうという方法もあるけど、それもよくないと思う。

別当は、湊神社や神明社の神事を担当する。日月堂は違う。日月堂は真言宗智山派に属し、和尚さんが担っている。

神社の世話役・役員・総代

昔は長男に生まれた人が神社の世話役として跡継ぎになった。今は平等に30～40歳になると神社の世話役をたてる。比較的若い人が務め、10人くらいで構成される。任期は3年である。神社の世話役は神明社と湊神社で兼任する。但し、蒲崎と納屋（新浜）で別の組織となるため、湊神社は両者を合わせた構成になる。

神社庁に届けて、任命書が発行されるのが「氏子役員」。氏子役員は任期が3年で「世話役」と同じ人が担当する。これは主に若い人が担当する。蒲崎では「世話役」が3年に1度全員交代するが、新浜では世話役のうち1人を交替時に残留させているようだ。

蒲崎(神明社)の総代は6人。これは湊神社の総代を兼ね、湊神社の総代は、蒲崎6人+納屋(新浜)2人で構成される。総代は任期はないが、引退はある。総代には「総代長」がおり、何十年も担当している。

津神社

蒲崎部落内にある小祠。D氏という人が祀っていた。コケブネと呼ばれる運搬船を用いて貞山堀（閑上方面）で商売していた。財をなし、東京へ出て行くことになったため、部落へ津神社を寄付した。それまですでに湊神社と神明社があったため、2社だと縁起がよくないといって3社にしたという意味もある。部落のお祭りのときには、津神社にも回るが、入り口が小さいので出入りが少々大変である。神武天皇社と同様、神社庁に届けていない神社である。

その他の神社

納屋（新浜のこと）には神社庁に届けていない神武天皇社という神社がある。また、貞山堀の水門近くに、石仏のような石に文字を掘ったものがあったかもしれない。漁師が海難事故防止にそれを拝んでいたようだ。話者自身は見たことない。神輿が集落内を回る時もそこまで行って拝む。

正月の行事

正月には臼をひっくり返して逆さにしてしめ縄をはった。元旦の朝には井戸から若水を汲んできた。年男が起きるより先には起きてはならないという。正月三が日はモチを食べ、4日目から米を食べた。11日は御用始め。今もそれを引き継いでいるのか、ガレキ拾いも12日から始められるらしい。

どんと祭りは平成になった後約20年前頃から神明社の境内で行うようになった。その前は各個人のオフクラサマと呼ばれるウチガミサマの前でオショウガツサマを送っていた。神明社で行う場合、火を焚くため消防団の人たちが担当していた。各個人の家で送る場合は、オフクラサマに納めた。

オフクラサマはイヌイカズマ（カズマは角の意か）に作る。それを何らかの理由で移動させる時には、別当さんに頼んでお祓いをしてもらい、新しく作る場所も別当さんに清めてもらう。昔はデパートで買っていたが、今は仏具屋で購入する。

オショウガツサマを送る場合は、「ホーイホーイ」というかけ声をかけるが、納屋は「ヤヘヤヘ」と言っているらしい。かつては14日の夜12時を過ぎる（日付が15日に変わる）と家の当主が行った。それよりも早い時間にやろうとすると、年寄りに「早く送りすぎだ」と叱られたものである。

14日の夜に小豆粥を食べると風邪をひかないと言われている。小豆粥を食べてからオショウガツサマを送る。小豆粥がはいった茶碗を洗った水を壁にかけると火災予防になるといわれていた。

自分は総代だったため、正月の初詣の時には3社全てを回っていた。自転車とかで行こうとしたが、やはり神参りだからということで歩いていった。元旦の朝に「元旦祭」が公会堂である。そこには別当をはじめとして総代、各種役員や長がやってくる。

被災状況その他

仮設に入った時、元の集落の単位のまま入居した。蒲崎と新浜、寺島は大体同じ仮設住宅に来ている。

元の村の時と同じように仮設に入りたいが、家族の規模によっては違う仮設住宅に入る場合もある。例えば、家族の人数とそれに見合う部屋の大きさによっては、皆とは違う仮設住宅に入らざるを得ない場合もある。とはいえ、比較的近い並びになっている。

今後の祭の継続については、総代が判断することではある。しかし、問題は元の地区に何人残るかであろう。蒲崎は125軒あるが、そのうち何人残るかによっては祭りをするかどうかが決まる。残った人で祭りをしなさいということになるため。新しい場所（例えば岩沼市街地など）に移転するとなると、新しい町内会に入らなければならないだろう。当初は蒲崎全体で20軒ぐらいが元の地区に住みたいと希望していたが、より多くの人たちが残るのではないかと考えている。

今年の「元旦祭」は実施する。公会堂が残っていたおかげで直会もできる。公会堂がなかったら、寒い中集まっても意味がない。